

隨想

### 史実と小説の間

「佐伯肩衝」と高政人質論

会員 御手洗 一而

(東京郵報齋・米水津出身)

海部、佐伯、毛利という文字をみると読み進み、小耳にはさむと次が聞きたくなる。いつのまにか習慣になつてしまつてゐる近頃である。そして、近頃読んだ小説の中に、内心は腹をたてたり、あるいは我が意を得たりと喜んで二題がある。

一つは、「名器争奪の戦国史」を特集した「歴史読本」十月号の「宗麟残光・劉寒吉」である。

大友家の重宝とした瓢箪の茶器(茶入れ)は、宗麟の弟晴英(後改め大内義長)が、砂長三州の国主大内家に迎えられた時、宗麟が引出物として渡した。後日、宗麟が大坂城で赤吉から茶を馳走になつてから、再び瓢箪の茶入れの素朴な姿にひかれる。弘治三年(一五五七)大内義長が毛利元就に追われた時、元就は、宗麟に義長を豊後に送るうかと使者を立てた。宗麟は、今は大内の人となつてゐること故御存分にとつき放し、その代り、瓢箪の茶入れだけは太友家の重宝として送つて貰つた。

舞台變つて島津家久が臼杵侵入の折、宗麟は小弥太なる小男につづらを預けて、豊前竜王城へ運ぶように命じた。その間島津の情報日加求鎮綱が連絡する。そして敗走する家父勢は、豊後と日向境の梓峠で、当時十八才の

佐伯惟定に敗れる。その時惟定は、宗麟の可愛がついてた小弥太を呼びとめると、小弥太は顔を伏せて逃げた。翌日、この時の拾い物として、加求鎮綱がそのつづらと宗麟に届け、小弥太が唾者でなく、薩摩兵であつたことを告げる。——こんな筋書きである。

私は讀み終つて「佐伯肩衝」を連想するとともに、馬鹿馬鹿しくなつた。成程、一つのつづらが宗麟を中心にして往來する設定は面白い。作者のいう「瓢箪の茶入れ」と「佐伯肩衝」は異物かもしれない。しかし、惟定の戦利品に加求鎮綱とは、何をか云わねばである。大友家の重宝も多数あつたであらうが、この梓峠の合戦に結びつけるならば、それは「佐伯肩衝」であらう。別のものとして「瓢箪の茶入れ」が宗麟の手許に度つたとしても、後世「銘」呼称のない名器など聞いたことがない。元来、この「佐伯肩衝」は、足利義輝公よりの頂戴品で、このことは「佐伯市史」のいう通り「大友興廢記卷十九、梓園軍之事附肩衝」として記載され、史実に残されている。この時、宗麟の手許に渡つてはいいない。後日、徳川家に献納され家康公什物として、「佐伯肩衝」の名が残つたのである。

「瓢箪の茶入れ」にしては、名器ならばその所在の有無も見届けて欲しい。歴史小説の分野では、史実の小説化には自から制約がある。いくら題材が名器争奪戦史としても、史実を曲げることばできない。腹が立つよりも、もう少し先輩達の残した郷土史の価値を知つて貰いたい。それから、惟定がいつ徳川家に献納したか考へるのも面白い。何かに記されているかもしれない。藤堂家に客となつた惟定は、藤堂高虎の加増移封に従つて、宇和島・今治・津と移つてゐる。四千五百石で佐伯屋敷を持つ

た伊勢の津時代かも知れない。——なんて考えるのは自由である。

次日我が意を得た物語りである。

司馬遼太郎書き下ろしの「播磨難物語」がそれである。この本は、黒田如水の一代記を、信長・秀吉の一時代を通じて、複眼視的に眺めた物語りであるが、私は毛利高政にまつわる語を探して、やはり期待と裏切らなかつた。その史実と小説の間を、三冊の中の僅か一頁から拾つてみたい。それは、高政の毛利姓一人質に關するところである。出自に關しては、

「勘八の森氏曰、元來か近江愛知郡森の出であつた。

祖父の代に尾張に移住し、織田家に仕えた。父は九郎左衛門高次である。父子ともに秀吉に付属させられ、

秀吉からとくに愛された。」

と紹介している。庶子説はとっていない。出自に關しては、私の研究の結果、「鶴藩畧史」の一連の系譜は成立するが、「温故知新録」「佐伯志」等の、「天正元年定春が森姓に改む」を入れるとうそになる。高政が森姓を名乗ることから、前記の一文が常識的な書き方であるが、私は、高政の家臣の中に祖父時代からの譜代臣の名前を見ないとこゝから、この移住説はとゞたくない。近江の出は、近江佐々木源氏につながる作爲が考えられる。庶子説については、秀吉の微祿過ぎる時代であることゆゑ、秀吉と高次の十歳の年令差を考慮して、あり得ないと思ふが、秀吉のスピード出世から否定の断定は出来ない。そして、毛利家に現存する毛利系図（市史）が、最もすつきりしていると思ふ。

さて、小説は備中高松城攻畧の語である。清水宗治の切腹が舟の中で行なわれ、秀吉方の檢使と堀尾茂助とす

る。「川角太閤記」によれば、「蜂須嶺考右衛門・森勘八、此の兩人遣はされ候」とある。高柳博士の「本能寺の度山崎の戦」によれば、小瀬甫庵の「太閤記」や、前記の「川角太閤記」は誤りとし、「秀吉事記」による杉原家次の檢死としたのが正しいとしている。余談だが、「太閤記」はやはり堀尾吉晴の顔を出させているが、これは何とも困つたものであるとして、雑書の部類に決まつている。

それはさておき、小説に戻ろう。

「約定によつて、兩軍撤退を履行する監視者を交換した。じつさ、いには人質といつていい。」

として、

「勘八と、その弟の、まだ少年のにおいの失せぬ權八（吉安）とが毛利陣へゆき、監視者と言ひ糸人質になりにおくのである。秀吉がとくに愛情をこめて勘八に声をかけたのも、当然である。」

と書いてある。作家の意圖する何とも奇妙な監視人質論であるが、考えてみると、史実に忠実に妙を得ている。

「毛利高政伝」も書くなら、やはりこの着想に注目したい。次に父九郎左衛門の事がある。

「城内の士卒たちは羽柴方が提供した舟も筏も水面に浮かび、岸へ送られた。そういう業務のいっさいをやつてゐるのが、勘八の父の九郎左衛門である。高松城が空になれば九郎左衛門が自分の家来をひきいて、一時的に城主になるように秀吉から命ぜられていた。毛利氏の出方はよつては危険な仕事であつたが、九郎左衛門はそういう地味で危険な仕事をよくこぶぶうの老人だつた。」

と描写している。

私はこの思考が好きである。事業高次の性格もそう友

と思うが、高政の性格に考えられるふしがあり、高次の戦力的背景が納得できるからである。背景とは、これより五年前の天正五年の高政松郷三千石食邑(鶴藩家史)のことである。私は、この知行は、高政よりも父高次に与えられたものと考えている。これは高政同輩の禄高の比較研究によって理解される。そして城代を勤め得る高次の力を、三千石の食邑が合致するよう気がするからである。次に毛利姓に關して付記している。

「ついでながら勘八は毛利の總帥輝元にも愛され、輝元から信頼され、この監視業務がおおると、とくに輝元から、「森」といふより、毛利と称したほうがよいのではないか。このこと、受けてくれるか」という話があり、のちに秀吉の許しをも得て、毛利氏を称した。」

この事に關しては、私は疑問に思う。女せならば、岩崎山の吉川元春、日差山の小早川隆景と陣取り、輝元は最前線に出ていないからである。しかも高政は、完全な人質として輝元の本營へ送られたわけではない。时期的に研究すれば余地があると思う。私は、秀吉と輝元の初見、輝元と高政の初見について興味を持ってゐる。いづれにしても毛利につながる縁は否定できない事実であるから、それともう一つ、大坂落城の七將の一人として自殺した毛利豊前守勝永(法、九州征伐のとき、豊前規矩・高羽二郡六ヶ石を賜わり、小倉城主となる)は、勘八の一族としてゐる。この關係は、薄字の私に<sup>と</sup>つては初耳であつた。

この付道のとほに  
 「毛利方からは、毛利氏の一族の毛利秀包、家老桂左繁が人質兼監視者になつて、すでに羽柴氏の城である高松城に入つた。」  
 と結んでゐる。

この感覺、思考が作家の腕のふるい所である。監視委員とも、あるいは毛利方からは撤収委員としてゐる。そして人質には違ひない。こうみると、成程人質論は成り立つわけである。そして毛利の撤収を見届け、備前西片上浦(現、備前町)に森勘八が着いたのは、秀吉先發後一日半にして、そこで官兵衛(黒田如水)が待つていた。これらは「川角太閤記」によつてゐるようである。

眞実を探し、史実と史実とをつなぎ合わせる役目を小説の筆にしている。そしてあふかもその時代に生きてゐるかのやうに、事実が展開される。最も確かな資料といわれる「天正記」では、

「杉原七郎左衛門尉檢使として、城を請け取り、丈夫に人数を入置置く。毛利家より懇望の條々を任せ、五か国并に人質・誓詞を請け取り、先づ毛利家の陣を動かせ——」云々

と、これだけである。あとは、他の「太閤記」、あるいは諸家譜、古文書によらぬならぬ。そしてその空間は、推量に任されてよいと思つてゐる。

尚余談だが、この間の事情から大分合同新聞の「小藩物語」は、毛利方は高政の秀吉庶子説を知つていたのではないかと疑問を提起してゐる。尤もである。しかし反面、秀吉は、高政が自分の子であるとする位の芸当が出来なかつただらうかとも疑問する。証拠がなければ、百異千變考えねばならぬ。史実と小説との間には、面白い史話が何げなく秘められてゐることがある。

以上、近頃望郷の歴史を想う二題であつたが、腹がたつたり喜んだり、次はどんな史話が現われるかを期待してゐる。

(おわり)